土方十四郎の憂鬱《銀魂・沖神》

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
土方十四郎の憂鬱《銀魂・沖神》

【Ｎコード】
Ｎ５９８０Ｚ

【作者名】
朝露詩奈

【あらすじ】
ある日、神楽が屯所にやってくる。
「サド、どう責任取ってくれるアルか…」
話によれば、頭痛と吐き気がするらしい。
しかも本人いわく、その原因は３か月前、総悟とアンナコトをしてしまったからだそうで……！？
これはマズイ！と思った土方は、とにかく焦り焦り焦りまくり、た

どり着いた「二人のカンケイ」の真相とは！？

土方十四郎の暴走（前書き）

はい。
土方十四郎の憂鬱、でございます。
涼宮ハルヒ的なアレとは全然関係ないし、暴走とかいっても初音ミクとも全然関係ないので、よろしくお願いします。
ただし、下ネタだらけですから、小学生の方はバック推奨です…。

土方十四郎の暴走

「サドぉぉぉ！！おのれェェェ！」

チャイナが屯所に乗り込んできたのは、まさに突然のことだった。
副長室でマヨネーズをすすっていた俺は軽く驚いたが、どうせあの総悟とケンカでもしたのだろうと簡単に察しがついた。というかそれしか考えられないので、深入りはしないことにした。

……なぜ、深入りしないかって？

決まってんだろ。
こんな天気のいい日には、マヨネーズを堪能しないで何をするってんだ。

「……お前のせいで…」
庭先で、チャイナのすっかり元気を失った声が聞こえる。
もちろんそんなもん無視。

…あれ？

元気が、無い……？？

「どう、責任とってくれるアルかぁ…」

聞きようによっちゃあ、泣いてるようにも思えるその口調。
あの総悟め、何したってんだ！？
チャイナを泣かせたとすると、後から天パ野郎が殴りこみに来るだろうから、というか絶対来るから、厄介事だけは避けてもらいた

いのに……。

とりあえずは、総悟の保護者（??）として盗聴、ではなく状況把握をしよう。うん。

「責任っつったってオメー」

総悟の、すごく面倒くさそうな声がする。

てことは、身に覚えがない？

「だから…絶対アレアル」

「アレって何でィ。はっきり言え」

「――3ヶ月くらい前」

「はあ？」

「あん中に出すから…こんなコトにっ」

「ああ…アレか」

総悟が黙った。

……オイ総悟、アレって何だ。なんで納得してんだ、チャイナのアバウトな説明で。

俺は心の中で総悟に問いかけ…そして、ひとつ思い当たった。

頭痛。

吐き気。

そんでもって、3ヶ月前、中に出す。

俺は、総悟たちに聞こえないようにつぶやいた。

「――孕ませた？」

そう。
きっと、そうだ……。

って総悟！
何してくれてんだテメー！！！！！
相手、１４歳だぞ！！？
つーかアンタらは何？そーゆーカンケイだったのか！？
喧嘩友達じゃなかったのか！？

総悟ォォォォォ！！！！！

俺の脳内は、すでに混乱状態だ。

てか、まあ、とりあえず落ち着いてタイムマシン……ねーし！！

そのとき、いろいろとパニクってる俺の耳に、総悟の信じられない一言が入ってきた。

「…風邪じゃね？」

何つー呑気なこと言ってんだアイツは！

「違うアル…」
うん、そりゃ違うだろーよ。

「あんなん、サドが出すから、いけないアル……。それに、あの時

はごっさ痛かったネ。ブッ刺さって、血まで出てきたアル」
「あれ、お前初めてだったのか。慣れねェヤツは、どうもいけねェ」
……俺は今更ながら、後悔する。
いくら総悟がサド気質といえど、まさか処女に中出しなど。
ああ、俺の見る目が甘かった…。

けど、俺が頭を抱えてる間にも、話は進んでいたらしく。

「当たり前アル、万事屋は貧乏ネ。お前ら税金ドロボーと違ってな」
「あー、そうだったな」
「とりあえず金出せや、イシャリョー!!こっちは被害者アル」
「なんで俺が払う前提?」

ああ、子供の養育費の話にまで発展してやがる。
俺はどうすりゃいいんだ!

「俺はどーすりゃいいんでィ。風邪の女に払う金なんざねーぞ」
だから風邪じゃねーだろ、普通に考えて。

……俺は、残念なことに。

局中法度にのっとって、総悟に最も重い罰を科さなければならないかもしれない――。

土方十四郎の暴走（後書き）

あの、忘年会の不祥事編。
あれ見たら思いついた話です。

かなり無理やりな展開になると思いますが、よろしくです☆

土方十四郎の戸惑（前書き）

えと

第２弾、戸惑でございます。

私は暴走のほうが好きです。（なんのこっちゃ）

ｃｏｓＭｏ@暴走Ｐ様、最高っ！！

土方十四郎の戸惑

その夜、俺は全然眠れなかった。
まず、夢にうなされた。
どんなのかってーと、万事屋が押し掛けてくる夢だ。

『くぉら大串ィ！てめ、どんな性教育したんだァ！！』
『知らねーよ！！少なくとも俺はまっとうに生きてきた！！総悟はたまたま、俺を見習わなかったんだ』
『お前のどこがまっとうだ！とにかく1兆円払え、ウチの神楽に一生癒えねェ傷負わせやがって！！！』

そしてヤツは、俺にネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を……

『ごふぁ！！』

と、ここで目が覚めた。
まだ春なのに、体中が汗でびっしょりだ。

「……」

それから総悟のことを考えると、おちおち眠ってもいられない。

総悟はまだ１０代で、若い。
その背中には一番隊隊長としての重い責任がのしかかっているし、しょっちゅう仕事をサボっているとはいえ、あの年ならもっと遊んでいいのではないかとも思う。連日の稽古も疲れるだろうから、どこかでストレスを発散すべきだとは常日頃から感じていたが……。

「どーしたものかなァ」

１８歳といえば、もっと分別が付いているはずの年頃であることも確かだ。１４歳の少女を孕ませたりしていいわけがないことも、知っていなければならない。

しかし…

肉親のいない総悟は、どこかで人とのつながりがほしかっただけかもしれない。
無意識のうちに、愛とか温もりとか、小さい頃に失ってしまったものを探して――。

「あ〝ーっ！！」

俺は激しく首を振った。

副長として、公平に裁かなければならない。
自分の情を交えてはいけない。
事実を、事実として受け取るのみ。

落ち着け、自分。

俺は、煙草に火をつけた。深く煙を吸い、ゆっくりと吐き出す。

総悟とチャイナは、恋人同士ではないはずだ。２人の言葉づかいから、それは分かる。

それにもし、総悟が本当にチャイナのことを大切に思っているなら、過ちを犯したことを素直に謝り、それから、親になれる喜びを分かち合おうとするはずだから…。

「……よし」

決心はついた。

春の匂いのする空は、すでに白み始めている。

土方十四郎の戸惑（後書き）

どうなるんでしょうね。
この続き。（ムフフフフ）

ついでに不祥事編、録画してあるけどまだ見てない。
気になるなあ、続き！

それでは次回、土方十四郎の消失にご期待ください＾＾
いや、誰も消失しないけど。

土方十四郎の消失（前書き）

うーん。
むりやりだなあ…展開が。
それでも良ければ、どうぞ読んでやってください^^

土方十四郎の消失

「総悟。てめーは明日、江戸を出ろ。1年間武州に戻って、頭を冷やしてこい」

「……はい？」

早朝の副長室で、総悟は首をひねった。

「…明日、武州で土方さんの頭かち割りゃいいんですかィ？」

「どう聞き間違えりゃ、そんな命令になるんだよ」

俺は頭をかいた。

「ま、こういう……なんつーの？デリケートな事？そういうことは、他人が首突っ込んじゃ駄目だとは思うが」

「土方さんが首吊ってくれるなら大歓迎ですが」

総悟の大ボケは、無視。

「昨日のチャイナの件でな。よーく、自分のしたことを反省しろってわけだ」

「反省することなんて、別にねェと思いやすけど」

総悟は、全く罪悪感を感じていない様子。ふざけたアイマスクを片手でいじりながら、俺を見ている。

「それより、むしろ感謝してもらうべきでさァ。チャイナ、本当に熱があってだるそうだったから、車で万事屋まで送ってやったんですぜィ。薬までやってなァ、あーあ、俺としたことが。なんでゴリラ娘に、あそこまで優しくしちまったんだろ」

「……は？」

俺は問い返した。
どういうことなのか、さっぱりわからない。

「だから、チャイナが来たのは旦那の差し金で」
「いや、ちょっ、総悟。ストップ」

両手で、総悟の話を止める。

「どういうことなのか、分かりやすく教えてくれ」
「はあ…だから――」

総悟の話によると、こういうことだ。

昨日、チャイナが風邪をひいて屯所に来た。

しかしチャイナはそれを、食中毒だと言い張る。3か月前、屯所で行った鍋パーティ（万事屋もなぜか乱入）が原因だと、クレームをつけてきたのだそうだ。

「俺が具材にあんなカニを出すからいけねーんだって、金をせしめようってな。大体、3か月前の食中毒が、今になって発症するもんですかィ」

…あん中に出す。
……あんなかにだす。
……あんな、カニ出す。

「そんなことだったのか……」

頭がくらくらする。

すべては……俺の、誤解…？？

「しかも、カニのとげが指に刺さって怪我をしたことまで、俺のせいにしやがって。そんなん、単にアイツがカニ食うのが初めてで、慣れてなかっただけなのに」

じゃあ…ブッ刺さって痛かったのは、総悟のアレじゃなくて、カニのとげ？
初めてだったのは、≪ピー≫じゃなくて、カニ鍋？

あ…ああ……。

「どうしたんですかィ、土方さん。脱力してやすぜ」
「そりゃ……」

言葉を発する気力すらも、俺には残っていない。

だって…そんな、勘違いだなんて……。

「取り越し苦労だった、ってわけか」
「へ？何がですか」

総悟がきょとんとする。俺はただ、首を振った。

「ま、いーや。とりあえず、今からチャイナの見舞いに行ってきやす。今日は旦那たちが珍しく仕事で留守にしてるらしいですからねィ、きっと、一人で寝てまさァ」

彼はみつ豆の缶を5つ、大江戸スーパーの袋に入れながら、にかっと笑みを浮かべた。

「熱、下がってるけどいいけど。…それじゃ」

「ああ」

総悟が、口笛を吹きながら部屋を出ていく。
心が浮き立っているように、その足取りは軽やかだ。

「おい。酢こんぶも買ってやったらどうだ」

ひょうひょうとしたその背中に声をかけると、総悟は振り返って微笑んだ。

「そうですねィ。元気になってくれるかもしれない」

――どうやら、俺の出番なんてなさそうだ。

俺は部屋に戻って戸を閉め、仕事に専念することにした。

土方十四郎の消失（後書き）

何のための消失だったんだか。
タイトルと全然関係ない……。

でも、まあ…終わってよかった！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5980z/

土方十四郎の憂鬱《銀魂・沖神》

2011年12月28日21時51分発行